

愛知県陶磁美術館・復元古窯焼成

特別講座 向付に迫る - 知る・見る・作る・そして使う -

美術館の中にある陶芸体験施設 陶芸館の可能性 3

岩渕 寛（陶芸指導員）

はじめに

復元古窯焼成 特別講座「向付に迫る」を開催した。当館では、館内施設の中の一つ、復元古窯2基（室町時代の土窯・江戸時代の連房式登窯）の様態保存と学術研究の観点から試験焼成を行っている。近年は、登窯を使用し、陶芸作家で当館の運営委員・資料委員である加藤清之氏を講師に迎え、復元古窯焼成「織部を焼こう」を開催している。「織部を焼こう」では、粘土、釉薬などの材料は、この地方で産出される素材を用意し、当館が今までに積み上げてきた焼成データと技術、そして講師と学芸員の知識と経験を活かし、愛知県陶磁美術館でなければ制作できない「織部」を目指す催事である。

窯入れや焼成に関しては、毎回のデータや試験体を考察すること、重要な工程の作業担当者を固定することで、概ね安定した焼成結果を得ることができている。また、素材についても胎土、釉薬、絵付の鬼板共に、桃山期の陶片資料と比べても、かなり近い質感や性状を試験体から見るができるまでになった。しかし、ここで気になり始めたのが、「織部を焼こう」に参加される方々の試験体としての「作品」の完成度である。焼成、素材が安定した結果、やきものの形を作る工程、装飾を施す工程の部分の技術の稚拙さや粗さが目に付くようになりはじめた。「織部を焼こう」には、まったくやきものづくりの経験がない方も参加される。また、初めてではなくても、技術や経験が乏しい方には織部の意匠や素材は難易度の高いものである。

窯起しの際に、目を引くような、感動を覚えるような作品を制作できるように、参加者を導いてはいけないだろうか。又、織部を代表する器形である「向付」に焦点を当て、食器として実際に使用することとも結び付け、参加者の制作の意識を高めることはできないか、そのような思いから、特別講座「向付に迫る」を開催することとした。

1 開催趣旨

復元古窯焼成「織部を焼こう」で積み重ねてきた経験を活かし、より精度の高い「織部」を制作することを目的として開催する。過程において、「織部」というやきものをより深く考え、感じていただくために、テーマを「向付」に絞り込み、知る、見る、作る、そして使うことを5回に分けて実践する。20名という少人数制で行うことで、密度の濃い内容の講座を講師、参加者と共に作り上げ、講師には初回と最終回に復元古窯焼成の講師でもある陶芸家・加藤清之氏を迎え、「織部」にまつわるお話や、実際に制作した「向付」を使用した食事会を行いながら、作品について御講評をいただくこととした。参加者は、勉強会や、見学会を通し、「織部」への知識を高め、その特徴の一つである「型づくり」にて制作する。型づくりのための「型」から制作を行ない、制作した作品はご自身で絵付、施釉を行い、復元古窯焼成にて焼成する。完成した「向付」は、レストランとうじにて実際に使用し、食事会を開催。また、講座の内容は一回限りでもすべての回を通してでも参加可能な内容とし、希望の回のみでの参加も可能とする。

当館で数年にわたり開催されている復元古窯焼成「織部を焼こう」は、はじめに述べたように、素材、焼成の技術・知識の収集と蓄積など、復元古窯焼成の運営の面についてはある程度の「成果」が上げられる様になった。一方で、参加者が制作する「織部」の作品の出来栄への「結果」は、窯起しの際に受ける印象が、毎年あまり変化が見られず、なんとなく停滞しているような雰囲気が感じられていた。愛知県陶磁美術館でしか制作できない織部を目指すために、陶芸館を中心に、館内の施設や資料そして当館の学芸員の知識を活用し、「織部」というやきものにもっと迫ることができないかと、今回の特別講座を開催することとなった。テーマは織部を代表する器形「向付」とした。

2 実施内容

第1回 「織部というやきもの」（勉強会）

日 時 平成29年7月8日（土） 13:30～15:30

講 師 加藤清之氏（陶芸作家）・神崎かず子（当館副館長）

担 当 岩渕 寛（当館陶芸指導員） 大西 遼（当館学芸員）

石川理恵（当館陶芸指導員）

会 場 愛知県陶磁美術館 陶芸館

参加人数 19名（応募者39名より抽選）

- ・「織部」とはどのようなやきものか、歴史、種類、用途についてスライドレクチャー
- ・「向付」の懷石での使用例、本膳料理などと比較を行いながらスライドレクチャー
- ・織部に使用する原料の解説（陶芸館所有の資料を使用）
- ・向付制作の実演（型起し）
- ・加藤清之氏所有の資料の解説

第2回 「元屋敷窯見学会」（見学会）

日 時 平成29年8月19日（土） 13:30～15:30

講 師 澤井計宏氏（土岐市美濃陶磁歴史館学芸員）
大西 遼（当館学芸員）

会 場 土岐市美濃陶磁歴史館、元屋敷陶器窯跡

参加人数 27名

- ・企画展『やきものの型』観覧
- ・元屋敷陶器窯跡等出土の陶片資料の特別鑑賞
- ・元屋敷陶器窯跡の見学

第3回 「型の制作」

日 時 平成29年9月9日（土） 10:30～15:30

担 当 岩 渕 寛（当館陶芸指導員） 石川理恵（当館陶芸指導員）

会 場 愛知県陶磁美術館 陶芸館

参加人数 27名

- ・「向付」制作のための「土型」を制作

第4回 「向付の制作」（2日間）

日 時 平成29年10月7日・21日（土） 13:30～15:30

担 当 岩 渕 寛（当館陶芸指導員） 石川理恵（当館陶芸指導員）

会 場 愛知県陶磁美術館 陶芸館

参加人数 27名

- ・1日目 「土型」を使用して向付の制作
- ・2日目 1日目に制作した向付に絵付・施釉
- ・向付は復元古窯にて焼成

第5回 「向付を使う」

日 時 平成29年12月9日（土） 11:30～13:30

講 師 加藤清之氏（陶芸家） 神崎かず子（当館副館長）

会 場 愛知県陶磁美術館内 レストラン とうじ

参加人数 21名

- ・「向付に迫る」にて制作した「向付」、加藤清之氏、当館陶芸指導員制作の器を使用し食事会を行う
- ・やきものを中心に会話を楽しむ
- ・加藤清之氏は所用のため欠席（食事にて使用する器を借用）

報告展示

日 時 平成29年12月5日（火）～平成30年1月21日（日）

会 場 南館ロビー

・参加者が制作した「向付」を南館ロビーにて展示

3 愛知県陶磁美術館・復元古窯焼成 特別講座 向付に迫る - 知る・見る・作る・そして使う - を振り返って

(1) テーマ・向付について

「向付」という言葉が果たしてどのくらいの認知されているのか。普段から様々な形でやきものに接する機会が多い私達や、日本料理に関わる料理人ならまだしも、一般の方々に「向付」という物が何を指しているのかあまり知られていないこの頃である。そんな見解から、企画を立案当初は「向付」に迫るという企画名で、果たして参加者が集まるのか、懐疑的な意見も聞かれた。「向付」という器が、特殊な器物であるという認識の上で、敢えて、この主題にて企画を立ち上げた。狙いは、知っているからこそもっと深く知りたい、なんとなくは知っているがそれがどういう物なのか知らない、そのようなこれからもっとやきものを好きになる、もっと知りたいと考えている方に喜んでもらえるような企画になればというイメージであった。またそれは、毎回「織部を焼こう」にリピーターとして参加いただいている方々にも当てはまり、作るだけではないやきものの面白さをしっかりと時間をかけて伝え、制作に活かすことのできる機会となるのではと考えた。そのような過程を経て、企画名は、復元古窯焼成 特別講座「向付に迫る」- 知る・見る・作る・そして、使う - に決まった。

向付を選んだことについて詳しく説明する。織部の向付といえは、成り立つための要素が沢山あるやきものである。材料は胎土が白土、もしくは赤土、鳴海織部ともなれば両方を一度に使うことになる。鬼板、白泥、赤楽を使用し下絵付も選択しなければならない。釉薬は緑釉・透明釉の掛け分けが主となる。志野織部の場合は緑釉を使用しない。成形は、ろくろ成形からの型おこし、タタラ板からの型おこしなど、型での成形が主である。三足、四足の足が付けられ、端正で、独創的な形状を持つものが多い。焼成は酸化焰、還元焰、両方に可能性があり、薪窯焼成時の焼成雰囲気は窯詰の箇所や炎の回り具合によっても左右される…。というように、多くの要素が入り混ざり成り立つやきものである。選択肢も様々で、個々に使用する材料のバランスによって、千差万別な意匠を作り出す事ができる。ここまで挙げただけでも、かなりわくわくするやきものだが、裏を返せば、作り上げるには非常に難易度の高いやきものということになる。特に大きな特徴でもある「型」での成形は、知識と技術が必要となる。だが、ろくろ成形のような、体で覚えるような技術は必要としない。しっかりと覚えてしまえば、誰でも型を利用して、制約はあるものの、様々なかたちを立ち上げることが可能な成形方法である。また、手びねりを体験時の制作方法の主とする陶芸館の施設の性格、参加者の経験値の違いなども踏まえたうえで、タタラ板からの型おこしによる向付の制作が面白い、しかも現実的ということで選択した。

(2) 織部というやきもの（勉強会）

「織部を焼こう」の勉強会は、本館講堂にて開催し、講演会のような形式を取っていた。「向付に迫る」は会場を陶芸館にて開催し、講師、担当者との距離を縮め、より密度の高い講座となるように工夫をした。原料などの資料に触れる機会や、制作の実演を加えることで、これから始まる講座への期待感を高めることも意識して構成を考えた。

当館副館長による、スライドレクチャーでは、織部の種類や歴史などと、「向付」の懷石での使用例を、本膳料理などと比較をしながら分かりやすく解説を行った。参加者にはとても好評で、懷石料理についてのあやふやな知識をすっかりさせていただいた等の感想を聞くことができた。清之氏の解説も、ユーモアを交えながら織部にまつわるご自身の体験談をお聞かせいただく貴重な機会となった。清之氏のご自宅から資料として加藤唐九郎作の「向付」をご持参いただくサブライズもあり、とても和やかな雰囲気ではあるが内容の濃い勉強会となった。

募集の結果、定員を大幅に上回る応募があり、スペースの問題と密度を高めたいという理由で抽選とした。「向付」という言葉で、予想を超える応募があったことに驚きを感じた。各回ごとに募集の予定していたが、多くの方にお断りをしなければならない状況が予想されることと、続けて受講したい方が落選する可能性が高くなったため、当初の予定から変更し、2回目以降は、すべての講座に参加することができる方を対象として募集を行うこととした。

(3) 元屋敷窯見学会（見学会）

土岐市美濃陶磁歴史館、元屋敷陶器窯跡にて開催した。館外の施設との連携を行うことで、当館の資料だけでは補えない部分を解消し、参加者に、「向付に迫る」が特別な講座であることを印象付けた。

幸運にもたまたま時期を同じくして開催中であった企画展『やきものの型』を学芸員の解説を聞きながら鑑賞し、次回の型制作に向けてとても良い機会になった。その後、二班に分かれ「織部」が作られていた元屋敷陶器窯跡の見学、あらかじめ選定した陶片資料などの特別鑑賞を行った。実際に織部が焼かれていた窯跡を見学することで、窯の構造などの解

説を聞きながら、当時の工人の気配や、窯場の雰囲気を感じることができた。陶片資料の特別鑑賞では、実物に触れ、質感を感じ、素地の厚みや釉の性状、絵付の筆の動きなどをじっくり鑑賞した。思い思いにスケッチを取ったり、写真に資料を収めたりしながら、これから制作する織部への意識を高めることができた。

夏の暑い午後であったが、参加者、担当にとって、充実感のある、素晴らしい経験となった。土岐市美濃陶磁歴史館と当館が連携したからこそできた、素敵な見学会だった。

(4) 型の制作

当館陶芸指導員の指導の下、「土型」の制作を行った。粘土2kg以内の使用で形状は自由。「抜け勾配」を徹底させ、見学会で得た情報を盛り込んだ。1時間の休憩を挟み、4時間という長時間の間、参加者の皆様は、集中して制作に打ち込んでいた。制作する力量は様々ではあるが、それぞれに思い思いの形状を考案し、昔からある形状を写し取るだけではない独創的な型がいくつも制作された。自分で制作した型を使用できるという期待感と、勉強会、見学会を通して、制作への意識が高まっているのを強く感じた。

(5) 向付の制作（2日間）

成形は、復元古窯焼成「織部を焼こう」と連動し、同じ材料を使用した。1日目は制作した土型を使用しての成形、2日目は絵付、施釉を参加者自身で行った。

タタラ板からの型おこしが初めての方も多く、経験がある方も土の型に始め苦戦する様子が見られた。時間をかけて型成形ならではの様々な形状の向付が制作されていった。完成のイメージができていられる方が多く、最終的には無事に成形を終了、乾燥後素焼きを行った。

絵付、施釉も陶芸指導員の助けを受けながら、それぞれに考え出した意匠でなんとか終えることができた。見学会の時に得られた絵付・施釉のバランスなどが加味され、例年になく充実感のある装飾が施されているように感じた。焼き上がりが楽しみであった。

共に講座を受講し、見学や制作を行ってきたため、お互いに交流が芽生えたり、陶芸指導員や学芸員とも気心が知れてくる方も多く、技術が乏しい方は周りの雰囲気に引っ張られて、一段上の制作が行えていたように感じた。講座という集団の持つ強さや、連続講座の良いところが沢山現れた。型一つとっても一人では複数の結果を得ることは難しいが、複数人で制作すれば多くの結果や工程を見ることが出来る。陶芸館のような施設や、教育機関ならではの状況が顕著に見て取れた。とても素晴らしいことである。

その後、参加者の期待と不安を含み、ここまで制作された「向付」は復元古窯焼成時に窯入れされ、焼成が行われた。

(6) 向付を使う（食事会）

館内のレストランとうじにて、参加者が制作した「向付」を使用して食事会を行った。自分で制作した「向付」に料理が盛られると気分が高まった。共に講座を受講している方の器の様子をお互いに見せ合いながら、和やかな食事会となった。献立は、レストランと講座の担当が協議をして決定した。講座関係者（講師、担当など）が制作した器も使用し、やきものを使う楽しさや、やきものの会話を食事を楽しみながら楽しむ機会とした。当館副館長を講師に迎え、器の取り扱い方や、料理の出し方、盛り付けなども担当ともども、楽しい雰囲気の中レクチャーしていただいた。料理が皿で運ばれてくるたびに歓声が上がり、自分の器に盛りつけていく。一つ一つの料理が際立ち、いつもよりおいしく感じてしまうような、そんな高揚した雰囲気の素晴らしい食事会となった。

器と料理との関係や、自分で制作したうつわを使う楽しさを実感できる、参加者、講師、担当が一緒になって楽しむ空間をつくりあげた。会場は当館内のレストランとうじとしたことで、館内施設の有効な活用方法を提案し、今後の館の活動で「食」をテーマに使用できるような選択肢を増やすきっかけも作った。

おわりに

既存の復元古窯焼成に手を加えて企画したこの特別講座。初めにイメージした過程と、結果がストレートに得られたと感じている。今までありそうでなかった企画であったが、少しの思考で充実した講座を作り上げることができた。特別講座「向付に迫る」- 知る・見る・作る・そして、使う - は、様々な経験と自信を担当者に与えてくれた。

参加していただいた皆様に助けられたことも多く、いろいろな方々の知恵と行動で、とても素敵な時間を過ごすことができた。準備もさることながら、講座は生きているので、所々の判断を柔らかく、且つ丁寧に行えたのは信頼関係があっ

のことである。

やはり、一番感じるのは、参加者、講師そして担当がなるべく近い距離を取り、一緒になって講座を作り上げていくことがもっとも重要ということである。

最後に今年度の復元古窯焼成の窯起しの際に、胸が高鳴り、例年より緊張して作品を見ていたのは、私だけではないはずだ。

向付に迫る 作例

